様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２９６５

研究課題名（和文）ジェイムズ・ジョイスと〈苦痛の鞭を打つ者〉―文学における痛みの文化史的考察

研究課題名（英文）James Joyce and the Flagellants: A Cultural-Historical Examination of Pain in Literature

研究代表者
南谷　奉良（Minamitani, Yoshimi）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：８０８２６７２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、1980年代から2020年代にかけての痛み論の興隆を背景に、James Joyce（1882-1941）の主要3小説に共通して現れる痛みの経験である「鞭打ち」に着目し、19世紀から20世紀初頭の英国・アイルランドの文化的局面においてその痛みを歴史化した上で、作品ごとに変化していくその打擲行為の意味を論じた。主な研究成果として、『ジョイスの挑戦』（言叢社，2022年）に所収の論文や「『ユリシーズ』と鞭打つ者―痛みにまつわるレオポルド・ブルームの功罪」(2023)として学術誌で論文化する他、一部の成果についてはアカデミア内外での口頭発表やオンラインイベントで発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題の学術的意義は、（1）「痛み」という言語化に抵抗する主観的経験を言葉で描こうとする文学テクストを考察する方法を具体的に提示したこと、（2）家庭や学校、監獄や軍隊、植民地、その他公共の場所で人間や動物に対して制御や懲罰を目的に行われてきた鞭打ち行為が英国・アイルランドにおける制度的宿痾として人々の心性や言動に刷り込まれるなかで、その痛みの経験が文学テクストの言葉に刻印されていることを示した点にある。社会的意義としては、個人の分断と絶縁が進む社会のなかで、現実的な「痛み」にまつわる諸問題と密接に関連した文学テクストの解釈と専門知をアカデミア外で発信・共有する方法を案出したことにある。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated the depiction of pain in three major novels by James Joyce (1882-1941), with a specific focus on the recurring themes of "flagellation" and "flagellants." Amidst the growing interest in pain studies from the 1980s to the 2020s, this project aimed to historicize the portrayed pain in the literary works within the cultural context of the 19th and early 20th centuries and to shed light on the evolving meanings and significance of flagellation across Joyce's works. The main achievements of this research were published in a chapter of a collection of essays, "Joyce’s Challenge: How to Get Hooked on Ulysses" (Genso-sha, 2022), and in the article "'Ulysses and Flagellants: Pain and the Sinful Kindness of Leopold Bloom" (2023) in an academic journal. A part of the research outcomes was also shared and presented through oral presentations and online events within and beyond academia.

研究分野：イギリス・アイルランド文学

キーワード：ジェイムズ・ジョイス　痛み　鞭打ち　動物　ヴィクトリア朝

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

1979 年に国際疼痛研究学会（International Association for the Study of Pain: IASP）によって提示された「痛み」の定義—「組織の実質的あるいは潜在的な損傷に伴う、もしくはそのような損傷について言葉で表現される不快な感覚あるいは情動体験」—は、画期的な転回点であった。痛みの原因の探求と治療法を神経線維や神経伝達物等の生体医学的解説に限定するのではなく、苦しむ個人の主観的な苦痛の経験の重要性と、言語や表現との関わりが医学側から示されたからである。この転回と軌を一にしながら、痛みの表現（不）可能性をめぐる Elaine Scarry（*The Body in Pain*, 1985）の研究や痛みの二元論的な理解に挑戦する David Morris（*The Culture of Pain*, 1991）の研究に導かれるかたちで、痛みの主観的経験とその表現の関係が、歴史や文化、感情や情動、共感や同情、言語や表現から学際的に多元的に論じられるようになった。近年では、医療人文学（Cole, et al, 2015）、感情の歴史学（Rob Boddice 2014）や痛みの文化史（Javier Moscoso, 2012; Joanna Bourke, 2014）といった分野でその成果が現われ、人文学のなかでも重要な研究領野を築きつつある。2020 年には IASP が 41 年ぶりに幾つかの重要な付記とともに定義を更新し、「実際の組織損傷もしくは組織損傷が起こりうる状態に付随する、あるいはそれに似た、感覚かつ情動の不快な体験」として、「言葉で表現される」を削除した。定義からこぼれてしまう社会的弱者や明示的な愁訴を行うことができない存在を包摂した点は意義深く、痛み論は個人の分断と絶縁が進む社会のなかで新しい展開と可能性を提示している。

上記のような 1980 年代から 2020 年代にかけての痛み論の興隆を背景に、本研究の学術的問いは、「文学作品のなかに描かれた「痛み」をどのように歴史化し、そしてどのように物語化すれば、 その固有の意味を考察することができるのか」であった。英文学の分野でも「痛み」は注目される研究分野であり、例えば生理学や医学が大きく進歩した 19 世紀ヴィクトリア朝の作家たちを扱う研究（Rachel Ablow, *Victorian Pain*, 2017）や本研究が扱う James Joyce（1882-1941）や Virginia Woolf（1882-1941）、Ernest Hemingway（1899-1961）、Samuel Beckett（1906-1989）といった特徴的な文体をもつモダニスト作家による痛みの表象に批評的関心が向けられてきた（David Biro, *Listening to Pain: Finding Words, Words, Compassion, and Relief*, 2010）。本研究ではこの批評的文脈から、次々に文体と表現方法を更新する Joyce の主要小説作品 *Dubliners* (1914), *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916), *Ulysses* (1922)に共通して描かれる痛みの経験である「鞭打ち」(whipping, flogging, caning, lashing)と「苦痛の鞭を打つ者」（flagellants）のアクターに着目し、描かれる痛みを 19 世紀から 20 世紀初頭の文化のなかで歴史化した上で、物語における固有の意味と役割を明らかにするものであった。

２．研究の目的

1980 年代から 90 年代にかけての初期の痛み論には、上述の Scarry や Richard Seltzer（“The Language of Pain,”1994）を代表として、言葉では激しい痛みを充全に表現することができないという主張が見られた。Scarry の痛みの表現不可能性は「拷問」という文脈を欠いたままやや単純化した形で受容され、批判の対象となってきたが、いずれにせよかくして問題化された痛みの表現（不）可能性については、それを文学作品において考察する方法論は未だ確立されていなかった。本研究では、（作者自身がクロンゴウズ・ウッド寄宿学校時代に実際に受けた体験にもとづいた）鞭打ちの懲罰が Joyce 作品において最も目立つ痛みの体験であることに着目した上で、(1) 作品に登場する「苦痛の鞭を打つ者」（flagellants）という複数のアクターを通して、その「痛み」とその表現を抽出し、それらを 19 世紀前半から 20 世紀初頭の英国とアイルランドにおける痛みの文化史の観点から歴史化し、(2) 物語におけるその痛みの固有の意味と役割、言葉によって描かれる痛みの表現（不）可能性とその伝達・分有の意義を例証することを目的とした。そして、主要３作品の小説において、「痛みの無化・言語化・分有」というフェーズ展開があることを仮説立て、年度ごとに分析の方法論を変更しながら、その解釈を試みた。上記の目的を実行するなかで、歴史と文化、言語によって規定される「固有の痛み」を適切に取り出すことができれば、Joyce のみならず、痛みが描かれるその他の文学作品の記述を読み解くための学術的な方法論を導き出すことができると考えた。

３．研究の方法

初年度には個別の作品分析に先立って、主要三小説から鞭打ちの描写の抽出を行った。すなわち、*Dubliners* からは“ An Encounter ”の学校内体罰の思い出を回想する老人と、“Counterparts ”で家庭内体罰を行う中年男性を、自伝的長編小説 *A Portrait* からは鞭打ちの体罰を行う神父、そして *Ulysses* からはサーカスの興行主、飼育動物の管理者、性技としての鞭を振るう娼婦、英国海軍や監獄、植民地環境下における刑罰執行者を選び出し、これらを概括して「鞭を打つ者」（flagellants）としてグルーピングした。そして Joyce は作品ごとに文体と表現方法を更新する作家であることから、鞭打ちの描き方は物語の形式と主題、内容に応じて変化すると想定し、痛みを描くなかで前景化される要素—習慣や制度、方法とその効果、嗜虐性や反復性、修辞性、政治的含意—に注目して、個々の作品の分析を行った。すなわち、(1) 短篇小説集 *Dubliners* では「麻痺」（Paralysis）の主題にもとづいた他者の痛みに対する鈍感さや反復性に着目し、制度的に循環

する体罰の力学が物語内容と文体、登場人物の記憶や精神に反映される様を考察した。(2) *A Portrait* では、同じく反復性に注目しながら、主人公の感覚的経験がそれを描く文体とともに変化・成長していく作品の性質を考慮して、多言語テキストマイニングソフト MTminer を利用して、第 1 章から第 5 章における形容詞の頻出度を調査した。これにより、例えば cold や hot といった形容詞がどのような主人公の感覚的体験に結び付けられ、それらがどのように別の事物や体験に適用され、その語義や用法を拡大していくのかを考察することができた。(3) 個人というよりも広く社会生活を描く *Ulysses* の分析に際しては、文化的・歴史的諸制度とともに痛みを考察するために、世紀転換期の新聞・雑誌・書籍を利用して、当時の言説がテクストにどのように反映されているかをみた。

特に (3) に関連して、現地資料調査とアーカイブ調査、文献のリスト化作業、ウェブサイトの拡充は歴史的アプローチをする上で有用な方法であった。「英国の宿痾」(English Vice) として根付いていたその打擲行為は様々な場面でいまだ実施されており、それゆえに同習慣や制度の廃止に向けた反対運動が当時起こっていた。この時期の文献や新聞記事に多くあたる地道な作業が数多くの発見に繋がり、なかでも 19 世紀後半から世紀転換末にかけて刊行されていた William M. Cooper, *Flagellation and the Flagellants: A History of the Rod in All Countries* (1870) や、Joseph Collision の *Facts about Flogging* (1905)、また「あらゆる形式の残酷な行為」に反対する方針をもつ人道同盟の創設者 Henry Stephens Salt (1851-1939) の著作 *The Flogging Craze: A Statement of the Case Against Corporal Punishment* (1916) が貴重な資料となり、歴史的に埋没していた副次的資料も明らかになった。同様に、Internet Archive や British Newspaper Archive, Irish Newspaper Archive といったデジタルアーカイブサービスを通じて、鞭打ちに関する主要な出来事や法制度、関連出版物のリスト化を行い、19 世紀前半から 20 世紀初頭という幅広い時間軸において鞭打ちの歴史を概観することに繋がった。同時に、小林広直と平繁佳織と共同で運営しているジョイス研究及びアイルランド文学研究の書誌サイト (*Stephens Workshop: A Critical Directory of James Joyce and Irish Studies*; https://www.stephens-workshop.com)を更新し、1920 年代から 2020 年代にかけての先行研究の整理を行い、研究的蓄積が厚い Joyce 研究を俯瞰的に見渡すこともできた。こうしたリスト化作業やウェブサイトの更新にあたっては本研究で雇用したリサーチアシスタントの助力が大きかったことも付言しておきたい。

加えて重要であったのが草稿研究の方法論であった。Hans Walter Gabler 氏を迎えた『ユリシーズ』の校訂版の歴史と問題をめぐる講演 (成城大学国際編集文献学研究センター主催) のワークショップの準備のために行っていた草稿研究への関心が契機となり、Trinity College of Dublin での資料調査において鞭打ちに関する異同があることを草稿 (V.A.8) 内に発見した。そこで Joyce は意図的に鞭打ちの廃止に関して重要な貢献を行った George Bernard Shaw や Charles Steward Parnell の名前を 1922 年刊行版では削除し、匿名化している操作が明らかになった。この発見により、Joyce が 19 世紀前半から 20 世紀初頭にかけての規制改革や反鞭打ち運動 (anti-flagellation campaign)に知悉していた事実が浮き彫りになった。

最後に専門知の社会還元について述べておけば、2019 年から 2022 年にかけて「2022 年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会」(小林広直・平繁佳織と共同開催) として、*Ulysses* を 3 年間かけて計 18 回で読破する企画を一般読者と行ってきた。この読書会で得たオンライン読書会の方法と経験知をもとに、新たに若手・中堅 Joyce 研究者とともに約 1 年間を通じた連続オンラインイベント「22 Ulysses―ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』への招待」(日本ジェイムズ・ジョイス協会・アイルランド大使館後援) を企画・実施した。このイベントでは、発起人 13 人の内の一人として企画・運営・広報を行い、他の発起人と協力して合計 22 人の関連研究者に登壇を依頼し、2 月から 12 月までの間に計 22 回を実施した。最大では 300 人を超える参加者があり、各回を平均すれば毎回約 180 名が参加する、文学イベントとしては異例の盛況を迎えた。専門知の社会還元は本研究に先駆けて持続的に行ってきたことであったが、これらのイベントを通じて、難解なことで知られる Joyce の作品の魅力をアカデミアの外に向けて発信・解説できたことは大きな自信となり、きわめて貴重な経験となった。いずれについても、コロナ禍の副産物としてのオンライン発信の形式をとったが、それによって研究成果を学会だけでなく、一般社会に還元し、その都度新しい「テクスト共同体」を形成し、多様性を確保しながら文学作品の解釈を深める方法論を築くことができた。この方法論については、現在進行させている同イベントの書籍化企画内で今後まとめる予定である。

４．研究成果

初年度の 2020 年度はコロナ禍がはじまった期間であったため、海外現地調査の計画が立てられなかったため、Joyce と鞭打ち、痛み論、感情史に関連する文献収集およびインターネット上で行える海外新聞・雑誌のアーカイヴ調査に努めた。この成果の一部は、6 月に開催された日本ジェイムズ・ジョイス協会第 32 回研究大会で発表した。短篇“An Encounter”に登場する老人の鞭打ちへの偏愛は伝統的に英国社会の中で容認・指示されてきた躾や体罰の慣習に下支えされたものであり、個人の嗜癖というよりは当時の教育学的言説をなぞった「痛み」を与える慣習的文化に依拠しており、鞭を打たれた者が鞭を打つ者へ転じる力学と暴力の反復的性格を論証した。痛みの問題は子供が打擲されるシーンを“Counterparts”にも現れるが、どちらの作品でも他者の痛みを無化する心性と、循環的な運動性の下に暴力の再生産が問題化されていた。上記をまとめた論文は同協会の査読付き論文誌 *Joycean Japan* に「ジョイスと鞭打つ者―「遭遇」における痛

みの反復と循環」として掲載された。また、代表を務めている痛みの研究会では、痛みの表現不可能性に言及した文学作品に焦点を当てた研究発表「未踏の雪原のフィールド―痛みを表現する障壁と困難について」を行い、合わせて九州大学の高野泰志氏に Frank Norris（1870–1902）の *McTeague: A Story of San Francisco*（1899）に関する講演を依頼し、痛みに対する感受性と麻酔の発明の関連、近年の情動論研究に関して、また痛みの文学史という幅広い射程で Joyce を位置づける方法について多くの知見を得ることができた。

二カ年目の 2021 年度には、『ユリシーズ』に関する二冊の出版 100 周年記念論文集の分担執筆を行うなかで、うち一つの『ジョイスの挑戦―「ユリシーズ」に嵌る方法』（言叢社, 2022 年 2 月）において、動物の痛みを扱い、特に鞭で打たれる動物の存在とその痛みを前景化する主人公レオポルド・ブルームの「眼差し」を構成している経験とその意義を論じた。日本ジェイムズ・ジョイス協会第 33 回研究大会（6 月開催）では、「ジョイスと鞭打つ者―『若き日の芸術家の肖像』におけるパンディバットの痛みと〈蔦状のシンタックス〉について」と題して口頭発表を行った。同発表では、別の外部資金プロジェクト（日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」学術知共創プログラム「人間・社会・自然の来歴と未来「人新世」における人間性の根本を問う」で習得した形態素解析を行うテキストマイニングの手法を通じて、主人公の内受容感覚を表す形容詞の出現頻度と各章の特徴語を示した。特に頻出度の高い “first” という語は「はじめのある状態から変化して、別の状態になる」成長と変化のモチーフを形成しながら、物語内において変化や周期、渦や螺旋、順序や優先を表現する原型的シンタックスを構成していることを指摘し、「痛み」が言語化されるときには、一つの感覚や一つの対象として知覚・表象することはできず、過去と現在、未来を内包する時空間のなかで捉えられるべき経験であることを論じた。本研究発表の内容はまだ論文化には至っていないが、テキストマイニングを使用した文学研究は定量的な分析結果がどのように作品の読み方を変えるかを説得的に論証するためには充分な紙数をもった発表媒体が必要であることから、同発表内容については上記の別プロジェクトで準備している叢書内で公表する予定である。

三カ年目となる 2022 年度は、*Ulysses* 刊行 100 周年を迎える年にあって世界各地でジョイス研究が活性化する中、専門知をアカデミアの内外で発表・発信する機会を多く得た。一つには、それまでに実施していた『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会」を成功裏に完結させることができた（2019/6/16, 8/25, 10/20, 12/22, 2020/2/9, 4/26, 5/30, 7/25, 9/26, 10/31, 2021/1/23, 3/27, 5/29, 7/24, 9/25, 11/6, 2022/1/15, 3/25, 5/21, 詳細は https://www.stephens-workshop.com/ulysses-in-2022/）。また別の上述の連続オンラインイベント「22 Ulysses―ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』への招待」では、計 22 回分（2022/02/02, 02/18, 03/04. 3/18, 04/01 , 04/15, 05/06, 05/20, 06/03, 06/17, 07/01, 07/15, 08/05, 08/19, 09/02, 09/16 , 10/07, 10/21, 11/04, 11/18, 12/02, 12/16）の企画・運営・広報を行い（図１）、発表者として登壇した 3 回のうち、動物の鞭打ちとその苦痛に関して解説を行った。この動物の痛みと苦しみの主題については、5 月に開催された日本本英文学会のシンポジウム内でも取り扱い、Anna Sewell、George Owell、H.G. Wells の小説内に描かれるロバや馬といった荷役動物を対象として、存在を不可視化される動物とその痛みの問題系を指摘した。6 月には 日本ジェイムズ・ジョイス協会第 34 回研究大会で発表を行い、家庭や教育現場、刑務所や軍隊内部の罰則として根付き、また荷役動物や演芸動物にも振るわれるものとして長い伝統的慣習となっていた鞭打ちの実践を歴史的な文脈と関連させると同時に、鞭打ちの痛みの要素を希薄化し、マゾヒズム的な快楽として描くようになった『ユリシーズ』の特異性と問題点を指摘した。また同月にはダブリンで開催された International James Joyce Symposium（6/12~6/18）に参加し、最前線の研究に触れると同時に、世界各地から集まってきた Joyce 研究者に加えて、研究計画にもあった Michelle Witen 氏と懇親する機会を得た。滞在中には上記で実施したイベント中にダブリンの街中からオンラインで実況中継を行い、『ユリシーズ』の作品世界をリアルタイムで紹介できた点も有意義な試みであった。

延長した最終年度には、Hans Walter Gabler 編纂によるいわゆるガブラー版『ユリシーズ』の歴史と諸問題を検討する「ハンス・ヴァルター・ガブラー氏講演「愛の復活、そのゆくえ―今、ガブラー版『ユリシーズ』の意義を語る」(成城大学国際編集文献学研究センター主催, 10 月 15 日実施)に登壇し、ガブラー氏とオンライン上で直接討議を行い草稿研究の重要性を認識できた。このイベント準備のために調査していた草稿研究の関連から、9 月に文献調査で訪問した Trinity College にて、『ユリシーズ』第 12 挿話の最初期の草稿（V.A.8）の鞭打ちに関する重要な異同を発見できた。また Joyce Tower Museum で展示されていた pandybat について館員から詳細な説明を聞くことができ、さらには National Museum Of Ireland で Howardena Pindell による“Columbus ”（2020）（※コンゴ自由国で鞭打ちとともに実施されていた手首切断の懲罰を表現したインスタレーションを知ることができたことも手伝って、11 月には京都大学英文学会の査読付き雑誌『Albion』に『ユリシーズ』と鞭打つ者―痛みにまつわるレオポルド・ブルームの功罪」として昨年度の研究発表成果を論文化することができた。本論文で論じたように、Leopold Bloom という新しい主人公の登場が、前二作にとは異なる鞭打ちの扱いを物語に導入することになった。子供や女性、障害者、動物、社会的弱者の痛みに配慮するその主人公は、「痛み」を読者に分有する役割をもつ一方で、不快な情動体験としての鞭打ちの痛みに限ってはその批判者とならず、自身のマゾヒズム的願望を優先して、むしろその意味を希薄にし、それを物語世界において後景化させてしまうのである。

研究期間全体を通しては、Joyce の主要な小説三作品それぞれについての「鞭打つ者」のアク

ターと痛みの描出法をヴィクトリア朝からエドワード朝にかけての文化史的観点から考察し、当初の目的である「痛みの無化・言語化・分有」のフェーズ展開を見出す課題を遂行することができた。すなわち、Joyce の鞭打ちの痛みの意味と役割は作品ごとに推移していき、*Dubliners* では他者の痛みを無化する嗜虐的サディズムを保存する（家庭内／学校内の）制度的宿痾として問題化され、*A Portrait* ではその嗜虐を受ける人物の主観的経験と言語化の問題が扱われ、*Ulysses* では Leopold Bloom という新しい主人公を通して、より後半な社会的領域で実施されている鞭打ちの実態とその痛みの意味が分有されるという展開をたどっている。上記の作品には鞭打ち以外にも様々な痛みが歴史的痕跡として残されており、また、痛みが「痛み」として明示的に描かれない場合もあるため、隠された痛みや現代の読者には見えなくなっている痛みの様相をテクストから表面させる方法が今度の課題となるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 南谷奉良	４．巻 32
２．論文標題 ジョイスと鞭打つ者―「遭遇」における痛みの反復と循環	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Joycean Japan	６．最初と最後の頁 6-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南谷 奉良	４．巻 69
２．論文標題 『ユリシーズ』と鞭打つ者―痛みにまつわるレオポルド・ブルームの功罪	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Albion	６．最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/Albion_69_17	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 南谷奉良
２．発表標題 馬のいない馬車―小説空間における荷役動物とその〈隠される仕事〉について
３．学会等名 日本英文学会第94回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 南谷奉良
２．発表標題 『ユリシーズ』第８挿話―食べる食べる食べる民のテーブル
３．学会等名 22 Ulysses―ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』への招待
４．発表年 2022年

１．発表者名 南谷奉良
２．発表標題 ジョイスと鞭打つ者 ―『ユリシーズ』における残酷な打擲具、あるいはブルームの痛みの罪について
３．学会等名 日本ジェイムズ・ジョイス協会第 34 回研究大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 南谷奉良
２．発表標題 ジョイスと鞭打つ者―『若き日の芸術家の肖像』におけるパンディバットの痛みと 〈蔦状のシンタックス〉について
３．学会等名 日本ジェイムズ・ジョイス協会
４．発表年 2021年

１．発表者名 南谷奉良
２．発表標題 ジョイスと鞭打つ者―“An Encounter”と“Counterparts”における痛みの詩学
３．学会等名 日本ジェイムズ・ジョイス協会
４．発表年 2021年

１．発表者名 南谷奉良
２．発表標題 “The Joyce Wars”とLove Passageをめぐる論争のゆくえ
３．学会等名 第一部ガブラー版『ユリシーズ』入門ワークショップ（ハンス・ヴァルター・ガブラー氏講演「愛の復活、そのゆくえ―今、ガブラー版『ユリシーズ』の意義を語る」）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

1．著者名 南谷奉良（分担執筆）、 金井嘉彦、吉川信、横内一雄編著	4．発行年 2022年
2．出版社 言叢社	5．総ページ数 17
3．書名 「『ユリシーズ』と動物の痛み ― レオポルド・ブルームの優しさについて」、『ジョイスの挑戦――「ユリシーズ」に嵌る方法』所収	

1．著者名 南谷奉良（分担執筆）、小川公代、吉村和明責任編集	4．発行年 2021年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 24
3．書名 「生々流転する『ユリシーズ』の世界―映画から漫画、グラフィックノベル、VRまで」、『文学とアダプテーションII―ヨーロッパ文化の変容』所収	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関